坂さんぽ ⑫

「灰爪の坂」 その1

昭和５２（１９７７）年、西山町灰爪の畑から、戊辰戦争における水戸藩諸生党の戦死者と思われる遺骨が発見された。しかし、水戸市民たちの間では諸生党は逆賊とされており、「供養など必要ない」といった空気が強く残っていた。

徳川御三家のひとつで、名君・徳川光圀（水戸黄門）を輩出した水戸藩では、幕末になると諸生党（佐幕派）と天狗党（尊王派）が、血で血を洗う抗争を繰り広げていた。明治４５（１９１２）年刊行の『水戸藩党争始末』は、その凄惨さを「屍骸は積て山を為し、流血は漲て川を為す」、「水戸武士たる者、殺戮し盡して殆と子遺なきに至る」と記している。

最初は諸生党が実権を握った。天狗党とその協力者に対する弾圧は苛烈を極め、一族もろとも容赦なく処刑していった。しかし、やがて戊辰戦争が始まると諸生党は賊軍とされ、朝廷から討伐命令が出された。ここで形勢は一気に逆転する。天狗党からの凄まじい報復を受けた諸生党は、たちまち勢力を失って水戸を追われた。そして、奥羽越列藩同盟（旧幕府支持勢力）の傘下に入り、会津藩から越後方面の防衛を依頼されて柏崎へ進む。

地理調査所発行　５万分の１地形図『柏崎』
（明治４４年測量、昭和６年修正、昭和３４年発行）に加筆

灰爪の坂（西山町灰爪）は、標高約５５ｍの丘を越える坂道である。丘の上には後谷ダムがある。現在は県道４８号長岡西山線が開通しており、海岸線の石地からここを経由し、薬師峠を越えて宮本（長岡市）へと至る。坂の下には県道５７４号寺泊西山線とＪＲ越後線が並走し、出雲崎、寺泊へと抜けている。近くに石地駅もあり、二方向からの街道が交差する交通の要害である。かつてこの地で、壮絶な戦いがあった。

慶応４（１８６８）年、この年の梅雨は雨量が多く、５月７日（新暦６月２６日）に長岡で信濃川が氾濫した記録も残っている。灰爪の坂も大雨でぬかるみ、泥だらけの状態であった。新政府軍の先鋒は高田藩が命じられており、高田（上越市）から長岡へ至る街道を押さえることが、この先の戦局を大きく左右した。すでに列藩同盟軍は赤田の戦いに敗れ、妙法寺峠（当時、曽地峠はまだない）を越える山沿いの街道を奪われている。鯨波の戦い、椎谷の戦いでも連敗しており、この灰爪を失えば海沿いの街道までも奪われることになる。

最新式のライフル銃を装備した新政府軍に対し、旧式のマスケット銃や火縄銃を主要装備とする列藩同盟軍は圧倒的に不利であった。射程距離、命中精度、破壊力、そして連射速度に格段の差があり、緒戦は有利に展開できても、次第に圧倒的な火力に押しまくられてしまうのである。こうした戦況の中、諸生党筧隊１５０余名は大砲を丘の上まで引き上げて、新政府軍の進攻に備えていた。

５月１４日（新暦７月３日）早朝、灰爪の坂で戦闘が始まった。　　（次回へつづく）